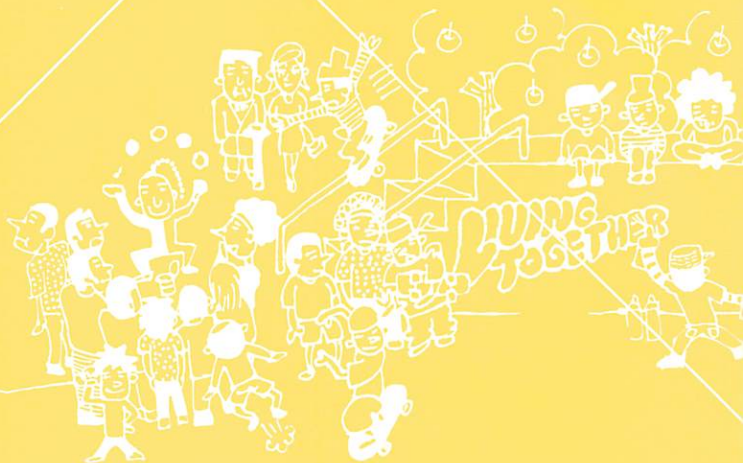


Think About AIDS

ラジオが届けたHIV陽性者たちの声

LIVING
TOGETHER

♥ TOKYO FM





誰もが暮らしやすい街ってどんなところだろう？

HIV陽性者が書いた手記を朗読する、
さまざまな著名人の声を、
ラジオの電波に乗せて届ける試みをスタートしてもうすぐ2年。

感染の不安を抱えていたり、
すでにHIVを持って暮らしてる人たちが生きやすい街というのは、
ほんとうは誰もが暮らしやすい街なんじゃないだろうか。

この街のどこかでひっそりと、眠れない夜を過ごしている誰かのもとに。
見えない気持ち、見えない空を飛んで、ふいっと届くといい。

HIVを持ってる人も、そうじゃない人も、
抱える荷物はそれぞれだけど、
わたしたちはもうすでに一緒に生きている。

WE'RE ALREADY LIVING TOGETHER.

Living Together計画とは？

「HIVを持ってる人も、持っていない人も、もうすでにわたしたちは一緒に生きている」というリアリティを共有するために、NPO法人「ぶれいす東京」とRainbow Ringが呼びかけ団体になって協働ですすめているプロジェクトです。

HIVは誰にとっても身近な存在です。けれど、まだ社会のなかでHIV陽性者が気安くカミングアウト出来る用意が足りないのが現状です。「家族にどう思われるだろう」「仕事を失うんじゃないだろうか？」「もう二度とセックスは出来ないんじゃないか？」そう考えてしまう陽性者も少なくありません。同じ理由で怖くて検査に行けないと考える「まだどちらかわからない」人も多いようです。リアリティが欠けていると、予防や検査の呼びかけも空振りしがちです。現実とは違ったネガティブなイメージが人々を惑わせているのです。

また、なによりも医療や教育などの様々な場所で、陽性者を受け入れる仕組みを満足できるかたちで作ることができません。

「感染したらどうなるんだろう？」ということや、当事者だけでなくすべての人々が知り、考え、足りないものは「それじゃ作らなくちゃ!」と思って行動することは、いつか自分や周囲の人たちがHIVに関わらなくてはならない時が来たときに、それでも誰もが生き生きと暮らせる「未来の居場所」を作ることにつながると考えています。

このプロジェクトでは、HIV陽性者やその周囲の人々に文章を書くというかたちで参加してもらい、冊子を制作・配付したり、それをもとにした朗読イベントを開いたり、ライブイベントや写真展、研修会のワークショップ、学校の授業…と、さまざまな集まりを捉えて、さまざまなアプローチが試みられてきました。

<http://www.living-together.net/>

TOKYO FMと Living Together計画のコラボレーション

HIV／エイズのイメージというと、いろいろな偏見や先入観があって、なかなか「誰にでも関係のある」病気なんだという認識が生まれにくい状況があります。誰にでも関係があるということには、二つのわけがあります。ひとつは、コンドームを使わないセックスをすれば誰もが持ちうるウィルスであるということ。そして、もうひとつは、HIVを持って生きている人はすでに、誰しもの隣に暮らしている存在なのだという事実です。しかし、そのリアリティは、この社会の中でなかなか見えて来ないのが現実です。差別をおそれて、自分に起きたことを周囲に話をしづらいついていて、HIV陽性者がまだたくさんいるのです。

TOKYO FMとLiving Together計画のコラボレーションでは、さまざまな著名人にHIVを持って生きている人たちの書いた手記を朗読してもらい、感じたことを電波に乗せていくことで、たくさんの方々のもとにメッセージを届けようとしています。言っちゃいけないことが沢山あるようなプレッシャーを感じて、はじめは躊躇してしまっただけで、手紙を読むうちに自分の中にちょっとした変化が生まれ、これまで抱いていた漠然としたネガティブなイメージとは違う風景が見えてくるのだと語った出演者もおられました。

出演いただいたみなさんは、HIVに詳しいから、舞台上に立つことを決めてくれたわけではありません。むしろ、何も知らない、考えたことがなかったという人の方が多くいます。だから手紙にふれ、生まれた共感や人それぞれ、自分の子供や家族の話をする方もいれば、友達と喧嘩した時のことを語る人もいます。でも、こうした一見HIVと関係がないようにみえる話こそが、リスナーのハードルを下げることに繋がります。また、そこで生まれたリアリティや共感の輪は電波に乗って、こわくて検査や治療に向かえない人たちが、予防に無関心な人たちの気持ちを変えたり、学校や病院や地域のさまざまな場所で、実際にHIVを持って生きている人々を支える体制を形作っていくことにもつながると考えています。

HIVを持ってる人も、「感染してるかも」とおびえて、だけど怖くて検査に行けない人も、閉じこもった友だちを心配して来ない返信を待ちながら携帯電話を握りしめる人も、この街の至る所にいます。ラジオの電波にメッセージを乗っけて発信することには、そんなどこにでもいる彼女らのもとにそっと言葉を届けられる良さがあるんじゃないかと考えています。

これまでの朗読をボッドキャスティングを通じてお楽しみいただけます。

下記のURLからTOKYO FMのpremium podcastingのページにアクセスしていただくか、またはiTunes→podcast→TOKYO FM→premium podcastingから、お手持のiPodにダウンロードしてください。

<http://www.tfm.co.jp/podcasts/premium/>

HIVをってる人も、
そうじゃない人も、
ぼくらはもう、
いっしょに生きている。

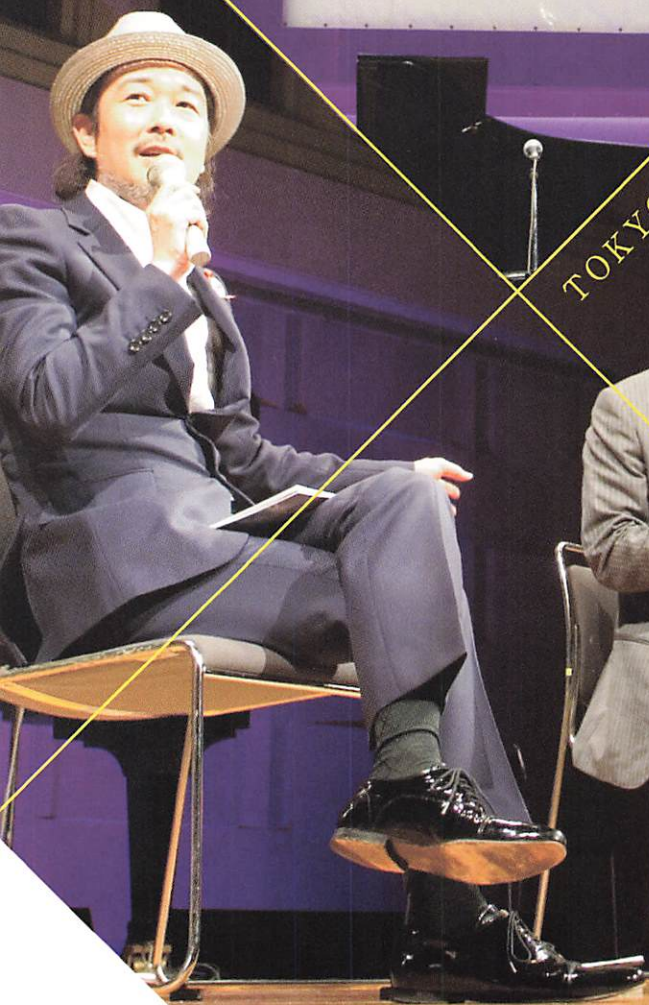
WE'RE ALREADY
LIVING TOGETHER.

LIVING + TOGETHER

TOKYO FM × Living Together

イベントの風景

2054 NO SMOKING





2007年12月から、半蔵門のTOKYO FMホールにおいて数回のイベントが行われてきました。たくさんのミュージシャンやお笑い芸人、アナウンサーや漫画家、映画監督やタレントといった著名人にご参加いただきました。意外な素顔を見せてくれた方、思わず本音が出たり、言葉に詰まってしまう方もおられました。広く名前が知られている人が、HIV陽性者たちによって書かれた手記をいくつも読み、心に響いたものを選んで朗読をすること。時にはご自身の体験にもリンクするような病気、セックスや人間関係についてのリアルな言葉を聞かせてくれることで、「なんだか世界が明るく見えた気がした」と語ってくれた観客もいました。

ミュージシャンの方々がステージ上で手記を朗読することは少なかったのですが、ライブ前に目を通して来てくださって、「ああ、この歌はあの手記に対するアンサーだなあ!」と思わせてくれるような場面もありました。音楽が、言葉や声にならない思いを乗付けて人の心に届けるツールなんだということを、改めて思い出させる瞬間でした。

僕にとって、今年の23歳の誕生日は、
一生忘れられない日となるだろう。
これからも誕生日が来るたびに思い出すんだと思う。
「HIVの陽性の告知を受けた」ということを。

今年は、本当にへこんだ。まさか、自分が本当にそうなの？
保健所で告知を受けたとき、頭のなかが真っ白になった。
そんなわけないという思いが強く、
その場でどこかの湖にでも
飛び込んでしまいたいと思った。

でも、今は少し落ち着いて、ありがたいことに、
両親にも、恋人にも話すことができ、
受け入れてもらっています。

僕は幸せだ。
ひとりで悩んでる人たちに比べればね……。

HIVは、いまはそんなに怖くないということもわかった。
そして感染したいま、妙に充実して、不思議と幸せだ。
わりといままでと同じように皆が接してくれてるし……。

今、僕と同世代の感染者がふえてるらしい。
でも、みんないるから大丈夫だよ。
失う物より、得る物のほうが多いと思うから……。
だって、今の僕がそうだし。
この病気になって一番なにを得たか、
取り戻せたかっていうと、親との絆だもん。

それこそが一番僕にとっての宝物だよ。

昔からつまなくて、寂しくて、遊んで泊まり歩いてさー。
そんな生活を7年も続けたらこんななっちゃった。
自業自得って言えばそれまでだけど、

でも、そんな僕のことを、親父は抱きしめてくれた。

「おまえは馬鹿だ、馬鹿だけど、
おれの大事な子どもだよ」って。

すごい嬉しかった。

なんで今まで僕はこんなに一番身近な人に
甘えなかったんだろうって思った。
そうしてたら何か違う展開に
なっていたのかもしれないのに。

確かに100パーセント後悔してない、
なんていったら嘘だよ。
だけど僕はこれが手に入った。それでいいじゃんか。

遠回りしたけど、一番子どものときからほしかったものを
得ることができたんだ。

親父は抱きしめてくれた
01

RYO



ケツメイシ MC

<http://www.ketsumei.com>

やっぱり本当にショックなこととか、ココロにもカラダにもひどい傷を負った時、世の中の人には「大丈夫?」と声をかけてくると思うんですけど、本人は「これが大丈夫に見えるか!」と思いながらも、「うん大丈夫」とか言ってしまったりするわけで。

そういう時に「これが大丈夫にみえるかよ、無理だよ!」と本気で言えるような人が身近にいることは、本当に幸せなことだと思います。ましてやそれが、親とか肉親とかだったりすると、ココロが落ち着いて拠り所となるんだと思います。

このお便りはお父さんとの関係をクローズアップしていたものですけど、自分も子供が2人いて、ホントにいらついたり、これだけ思いやっているのに僕の思い通りにならないとか、すれ違いが色々あって。でも、自分のことを振り返ってみると、親の愛に気づいたのは子供ができてからだったことに気づいて…。

ここまで成長させてもらったことに感謝してるんだけど、言葉にして「ありがとう」とか、今までの気持ちとか両親に対して言ったこともないですし、親も照れがあって子供の僕に対してそういった表現をしてきたことがなかったので、親とのつながりとか愛を、このHさんの手紙を読んで、改めて強く感じました。

明日ももっといい日

つばさ

朝6時に起きて、お弁当と朝ごはんを作り、
娘といっしょに朝食。
娘を小学校に送り出し、
朝の番組の占いをしてから会社に行く。
運転中は大好きな音楽といっしょ。

会社に着いたら、まず自分と同じ部署の人たちの机を拭いて、それから仕事。
お昼休みは同僚とお弁当を食べながらおしゃべり。
たまにコーヒーを入れたり、
おやつを食べたりして、忙しいときには残業もして帰宅。
母が用意してくれた夕食を娘と一緒にいただいて、
みんなできょう一日の話をする。
宿題を手伝ったり、本を読んだり、
テレビやビデオを観たりして夜を過ごし、
娘といっしょにお風呂に。

「今日もいい一日だったね。明日ももっといい日だね」と
言いあってベッドに入る。

幸せ。こういう毎日がとっても幸せ。

10年あまりまえに感染がわかってしばらくは、
感染していない人以上に幸せにならないと
プラスマイナス・ゼロにならないような気がしてた。

それほど、HIVはわたしにとってネガティブなものだった。

今は、HIVはただのHIV。わたしはわたし。

毎日、大好きな人たちといっしょに過ごし、
大好きな仕事をして、
大好きなことをいっぱい楽しむ。
自分らしくいられるっていいなあ。



わたしは朗読が大好きで、こんなステキな川村結花さんの伴奏で朗読をさせてもらえて、なんて幸せって思いました。

本当に、ささやかな毎日のなかに散らばっている、当たり前だと思っていることの中に、すごく大切なこととか、大切にしたいことが一杯詰まっていて、それを私たちは、なんだか大したことないような気がして通り過ぎていたり、指の間から平気でこぼしていたりするな、なんて思います。

でも、このつばささんの手記を読ませてもらって、もちろんその他の皆さんの手記も読ませていただくと、当たり前だと思ってきたこと1つ1つにまっすぐ向き合って、もっと力強く生きていこうという前向きな一歩を、それぞれの手記から感じて、私はそうやって生きているだろうかと、とすごく考えました。

素敵な時間をいただいたな、と思っています。

みなさんも手にとられて読んでみると、例えば家族と色々な話ができたりするんじゃないかな、と思います。

素敵なオリスナスプレゼントありがとうございました。

中嶋朋子

女優

<http://www.nakajima-tomoko.com>

budded

ユウジ (25歳 東京都フリーター 感染発覚歴2年11ヶ月 服薬歴2年5ヶ月)

今月の初め、通院している病院へ行った。自分は投薬による治療も順調で2ヶ月に一回の受診ということに、ここ最近はなっている。幸運にも前回の採血の結果を聞くためだけに通っているといってもいいほど安定を保てている。検査結果によって通院はまさに一喜一憂の連続。それでも最近病院へ向かう足がだんだんと重くなっていた。この日、数値を測り始めてから初めて、CD4の数値は600を超えた。HIVに感染していなかった頃の自分の数値は知らないけれど、きっとその頃と遜色ない値だと思う。安堵した。

今朝は違う病院にいた。目の前には赤ちゃんがいる。ほんの数時間前に生まれたばかりで助産婦さんに身長などを測ってもらっているのをガラス越しに見ていた。姉が二人目の女の子を産んだ。幸い自分は姉弟の仲が悪くなく、自分の子どもでもないのに義兄よりも早く病院にかけつけてずっと赤ちゃんを眺めていた。何を思うでもなく、たったひとつ、無事に生まれてこられてよかったという思いを繰り返し巡らせていた。

「生まれたときに障害なんかがあると悲しいけど」隣で見ていた母がつぶやく。3秒の逡巡の後、ほんとだね、と自分は声にならずにただ頷いた。自分は今や障害者に属する。免疫機能障害。薬さえ飲んでいれば今の自分ならばしばらくは実感することはない類の障害で、苦ではない。自分で足も動かせるし、自分の未来は自分で選べる。障害は不自由であっても不健康や不幸ではないことは知っている。人を悲しむことが卑しいことだということもわかっている。それでも母の言葉は真実だろうと思う。

健康なことは嬉しい。病気は悲しい。そうではないよと叫ぶ声も自分の中にはあるけれど、人間が願えることはそんなにも正しいことではないのかもしれない。

東京では桜が満開を迎えようとしている。春という季節を名前の一字に授かったこの赤ちゃんにもそれ以外の季節は来る。自分のCD4値も高いままではないだろうと思う。誰かの健康を願うことは虚しいほどにいいおしい。桜が咲くこと、待ち遠しく思うことを本能として知っている日本人でよかったと、なんだかよくわからないけどそう思った(笑)



橋口亮輔

映画監督

<http://www.gururinokoto.jp>



シンプルなことが一番、人生に大事なんだなあって改めて思うんです。「こんにちは」とか、「さよなら」とか「ありがとう」とか「いただきます」とか…。「おいしいね」「そうだね」、「きれいだね」「そうだね」。そういうことがどんだけ大切かってことを、そしてそれを一つ一つちゃんと感じていくってことが…人生をないがしろにしないっていうかなあ…、そういうことを最近ずっと考えてます。

ぼくは6年前、鬱で一年間仕事を休んで、毎日死ぬことばかりを考えていて、「もう映画なんてどうでもいいや」「この先人生やってって何があるの、なんにもないじゃん」と思ってたんです。そのあともいろんなことがあって散々、人に踏みつけられたり、裏切られたり…。だけどもう一回自分に映画を撮らせてみよう、空を見上げて「ああ…なんて青空はきれいなんだろう」って思わせてくれたのも人なんですよね。

ぼくが苦しい撮影をしてるのを知って、毎日現場に助けに来てくれた助監督。朝、携帯を見ると「橋口さん! 今日めぼく、行きますからね!」っていう留守電が入ってたりとか…。

苦しいときに、人がそうやって示してくれる気持ちに素直にほんとに「ありがとう」って思うシンプルな気持ちがすごく大切なんだな、ってことをはじめてわかってもらえた映画が「ぐるりのこと。」でした。

映画の最後の日にもっと(笑) 今よりも号泣して挨拶をしたときに後ろから「ふっ」と抱きしめてくれる人がいて、それ、リリーさんだったんですけど、この世のものではない、なんともいえない柔らかなものに包まれた気がして、「なんて幸せなんだろう」って思えたんですね。

きついことばかりのように思えた6年間だったけど「ああこんな幸せが待ってるんだったら」って…、今までの時間が、ほんとに苦勞が吹き飛ばすような瞬間で。

人間にとって、ひたむきさってすごく大切だって思うんです。

ひたむきをなくすと人間、下品になるって思ってるんですけど、なかなかひたむきに生きてる人が報われない、報われることが少ない今の世界かもしれませんが、ひたむきに、丁寧に、人生を生きてると、きっと誰かがまた、自分の手を握りしめてくれるんだなと。

ぼくが読んだ、HIV陽性者が書いた手記にあるようなシンプルな気持ち。そういうことって、人生にとって一番大切だってことを、今また改めて感じています。

君の寝顔を見ていると

—HIV+のパートナーでHIV—（会社員 30代前半）



君の寝顔を見ていると思わずにっこりしたくなる。

すやすやと僕の腕の中で安心して眠っている君を見ると、
僕が居て君の役に立っているんだなあって。。。

自分の存在価値を見出すことができる。

こんな自分でも一緒に居て
幸せだと言ってくれる君がいるから僕も幸せなんだよ。

でもね、僕は時々不安になる。

それは君が重い治らない病気を抱えているから。

いつ発病するかも分からない。
いつまで生きているかも分からない。

でもね、決めたんだ。それまでずっと一緒にいようってね。

君の生きる糧になりたいと思う。

きっと自分より先にいなくなっちゃうんだろうけど、
僕が君を看取ってあげる。

病気になってもよかったって思える人生を歩めるように。

二人で楽しく頑張っていこうね、大好きだよ。

大貫妙子

アーティスト
<http://onukitaeko.jp>



私の座右の銘は「死ぬまで生きる」。

当たり前のようにだけど、死んだように生きている人は一杯いると思う。
死ぬまで生きろうとしている人が私はとても好き。

生きるっていうのは決して長さではなく、
どんな風に生きたかという中身のことだと思う。

HIVは、生きることを改めて
自分のこととして考えるいいきっかけ。

私の周りにもポジティブの人はいるけれど、
私はHIVの感染を告げられても、「だから?」というタイプ。

私も一生懸命に生きなきゃいけないし、
だからあなたも同じように一生懸命生きて、
という気持ちで、そう言います。

でも、大変なこともある。
たまには、「カラダ大丈夫?」とか「仕事手伝おうか」と
声をかけてあげられる、
そんな距離感で、これからもポジティブの人たちと
付き合っていきます。

元彼がエイズで亡くなってしまった。
恋人としてのつきあいがなくなったあとも身内同然の交流があった。

一昨年、秋、体調を崩して大きな病院に入院した。
その病室ではじめてHIVであること、
カリニ肺炎であることを本人の口から聞いた。

HIVにかんする知識はある程度もってはいらなかつたが、
発症してしまった以上、助からないのではないかと思い、
悲しみのどん底に突き落とされてしまった気持ちになった。

HIV/AIDSについてさらにくわしく調べたところ、
現在はカリニ肺炎も薬でよくなることを知り、とりあえず安心。

でも、彼はなかなか薬が効かず、
副作用もいろいろ出て苦しんでいるのを見るのは、本当に辛かった。
本人もいろいろな不安から、両親のもとに戻りたいということで、
実家の近くの病院に転院することになった。

彼の実家は遠方なので、転院したら、かんたんに会いに行けない。

転院する前日、消灯時間に病院をあとにすると、
笑顔で大きく力いっぱい手をふってくれた姿が
いまでもはっきりと浮かんでくる。
時間がかかっても、かならずよくなって、
また東京に遊びにくると信じていた。

でも、病状が急変し、人工呼吸器をつけたという知らせがはいった。
なんとか休みをとって、病院に駆けつけた。ずっと昏睡状態だったのに、
意識が戻った。話せないけど、筆談ができた。かなり苦しいはずなのに、
たくさんのことを書いてくれた。

『出会えてよかった』って、はじめて言ってくれた(書いてくれた)。
彼の病状がよくなりないうちに、東京に戻らなければならなかつた。
それからしばらくして「あと三日しかもたない」と連絡がはいった。

涙が止まらなかつた。

翌日、始発の新幹線で行くつもりで準備をしていたら、
夜明けまえに、彼のお母さんから「いま亡くなりました」と
電話がはいった。

でも、信じられなかつた。

病室に着いたとき、彼はまだベッドのうえにいた。

冷たくて、動かない。

笑顔だった。

あれから半年ちかくがたとうとしている。
通夜、告別式に参列して、骨も拾ったけれど、
まだ、彼の死が信じられない。
以前のように、うちに遊びに来るんじゃないか。
インターホーンが鳴って出ると、
いつもの笑顔で立っているんじゃないか。
ひとりではいるときは、彼の名前を口に出して呼ぶ。
自分自身、こんなにつらいことがあるとは思えなかつた。
父の死より、ずっとずっと大きな悲しみ。

なにをしても心から楽しめない。
思い出がたくさんありすぎて。

スポーツクラブ、食べもの屋、ディスカウントストア、
ドライブ……、
彼といっしょに行っていたところも、いまはひとりでやっている。

車の助手席に彼はいない。

どんな形でもいいから会いたい。
自殺したいとは思わないけど、死んだら会えるのかなと思ってしまう。
もっともっというんなことをしてあげたかったのに。

彼の両親や兄弟は、僕を身内同様に扱ってくれる。
本当によくしてくれる。
両親の悲しみは僕以上なので、
近かったら頻繁に会いに行きたいけど、
なかなかそうもいかない。

悲しみや辛さが薄れる日、なくなる日、涙を流さない日がくるのかな。

でも、彼はずっと心のなかにいるだろう。

彼も言ってくれた。『心はいつもつながっている』って。

5年間、本当にありがとう!! いつか会える日まで。

助手席

もし自分の友だちにHIV陽性の人がいたら、誰かと付き合う時にどうしよう、って考える時と同じように、それは別に差別とかではなく、考えると思うんです。デブって言われることをおいしいと感じるやつと、絶対にイヤだと感じるヤツがいるように、HIVのことも、差別をなくして何でも気兼ねなく話そうよ、といっても、それをイヤだという人と、そうしてほしいという人があるはず。だから、HIVといっても特別なことはなくて、普通の友達と付き合う時と同じように、コイツとはどう付き合っていけばいいんだろうって、やり取りの中で距離をはかっていくのかな、と思ったんですよ。もっと言えば、同じ種類の人でもないし、みんな千差万別なんだから、HIVっていう一括りで考えて「HIVの人とはこういう風に対応しよう」っていうんじゃなく、コイツはこういう性格だからこうやって付き合うのが一番だろう、っていうのが、やっぱり人同士なのかなって思う。



彼はもういない
—— 会いたい

品川祐

芸人・映画監督

<http://shinagawa.taff.jp/blog/blog.html>

友達に誘われて扇町公園でやってた
「PLuS+」というイベントに足を運んでみた。

いつもは落ち着いた公園内も今日は大賑わい。
人が多いところが苦手の俺だけど、
たまにはいいなって思えるいい雰囲気だった。

その公園内のとあるテントで陽性者と
その周りの人の声が展示してあった。

そこで久しぶりにいろんな同じ立場の人の声にふれることで、
誰かの言葉に心のなかでうんうんとうなづいていたり、
胸の奥に隠していたり閉じ込めていたものに気づいたり、
心が忙しく走り回りちょっとぐらつく状態の帰り道…

偶然“あいつ”に会った。

“あいつ”とは俺が人生最大最後の恋愛を
したと思える相手のことだが、
ヤンチャ(オテンバ?笑)だったあいつが、
今は彼氏と同棲して幸せに暮らしていると知って、
こうどこかで偶然会っても、
今は笑顔で話せる俺がいるんだろう。
まあ、あいつのことを書くとは思わなかったが(笑)。

少し話しはそれるが、そのイベントの翌週に
俺は入院が決まっていた。
今は毎日飲む抗HIV薬をいったん中断しているのだが、
どうやらそれも再開になるような状態の体らしく、
先週ブッ倒れてしまい…
まあ、いっきに体にガタがきたみたいだ。

ボジだということをカミングアウトしていないあいつに、
会話の中で先週倒れたこと、来週入院することも話した。

そう、俺にとってはこれでも
精一杯のカミングアウト…。
そんな俺の精一杯をよそに
「言ってくれたらお見舞いに行ったのに!」と、
相変わらず無神経な優しさで俺を困らせる。
お見舞いなんかに来られちゃ…ばれるやん(汗)。

こんな日にあいつに会うのはちと辛いな…と思いながら、
その場を後にして、しばらくするとあいつからメールが来た。

「入院してたって…そうなん? 違うかったらごめん。」

そりゃボジかもって疑われるよな…と苦笑したが、
あいつを人として信じているしもう隠すつもりもなかったのもので、
ひとまず『なんでそう思ったん?(笑)』と返してみた…

そして、その後あいつから送られてきたメールの言葉は、
その日見たいろんな陽性者や
その周りの人のどの言葉より、俺の胸に届き心を揺らし、

そして涙となって溢れた。

『自分もボジやで。』

自分の愛してる、愛した人がHIVに感染する。
有り得ないことじゃないのに、
人はみんなその可能性を信じようとしなない。

そして俺も同じく、その可能性を信じたくはなかったのだ。

こうして今、心がぐらつき揺れているように。

自分もボジやで。
T/Z
(30代前半 大阪府 飲食店勤務
感染がわかってから3年半・服薬中～現在中断中)



内田春菊

漫画家・女優

<http://www.knockoutinc.net/profile/shungiku.html>

じゅくりですね。

もしあたしだったら、自分のことで精一杯だと思うのに、大好きだった人が同じ立場ってことがわかって、もの凄く混乱すると思います。

例えるの難しいんですけど、子宮筋腫とか、自分の中に何かいるって感じを、あたしの考えですけど、憎むべきものっていう風に考えないで、それも自分のカラダの一部っていう風に考えられるほうが、絶対的な状態としていいと思うんです。

色々なことがあると思いますけど、これも自分、あれも自分、という風に、ニキビ1つにしても、何かトラブルが起こっても「今の自分はこんな感じ」っていう風に思って、それを追い出したいと思うよりも、自分を愛する方向で考えたほうがいいんじゃないかって。

感染されると、これとこれができないとかマイナスで考えることも多いと思うんですけど、ぜひリラックスして健やかにお過ごしください。

僕はHIVとセックスを どうやって受け入れたのか。

ようすけ

保健所で受けた検査で「陽性です」って言われたときは、正直言って「運が悪かった」と思った。

「ゴムつけた方がいいよ」とか、「この行為は危険です」なんて、ずっと前からアタマでは分かっていたし、実際そう毎回毎回リスクなセックスをしていたわけじゃないんだけど、

それでも、「たったの何%の確率にハマったんだ」という気持ちからどうしても抜け出せなくて…

「これなら平気」のつもりで、誰かに感染させてしまうって思ったら、セックスがとても恐かった。

欲情しない、ってワケじゃないんだよ？

まあ、告知されてからしばらくは、とてもそんな気分にはなれなかったけど…

感染してから半年後くらいかな？

どーしてもやりたくなくて、ハッテンバに行ったんだ。

でも、いざ始まってみると、急に気分が冷めちゃってさ。

そいつがセックスに対して(ごく当たり前に)貪欲であればあるほど、それが健康な人間の証のように見えて、めちゃめちゃ羨ましくて…

そのうち「俺なんか不釣り合いだな」なんて、劣等感と罪悪感が混ざったような、最悪な気分に見えて、結局、その日はヤラずに帰ってきた。

…そんな、元来セックス大好きな僕にとって地獄のような日々から、さらに1年が過ぎて。

とても幸せなことに、こんな僕にも恋人ができた。HIVに感染していることも、受け入れてくれた。

僕は、自分がウイルス持ってるって知ってるからこそ、大切な人に病気をうつさないように工夫できるんだよね。

検査を受ける前の自分だったら、きっと「こいつ遊んでるな」なんて疑われるのが嫌で、コンドームなんか使わなかったかもしれない。

あるいは「俺のこと疑ってんのか？」って言われるのが嫌で「コンドーム使ってほしい」って言えなかったかもしれない。

そして生でやりまくって、大切な人をHIVに感染させて、気づかないまま何年後にエイズを発症したら…

そのときは、本当に地獄だったと思う。

あの日、保健所で「陽性です」って言われたとき、僕は「運が悪かった」と思った。

だけど本当は、同時に少しだけ、安心しても良かったのかもね。

リリー・フランキー

作家・俳優・イラストレーター
<http://www.lilyfranky.com/lily/news.html>

いろんな人が普通に日常の中で生活して、その日常ですべてのことが起きてるんだけど、一番良くないことが、いまだに例えばHIVとか、エイズとか、ゲイのことで、「自分には関係ないんだ」「そういうことは特殊な、非日常のなかで起きてることなんだ」って思ってしまうことだと思う。偏見って言うんですかね、もうこの時代になったらそれは偏見とは言わずに無知っていうんだと思うんだけど。

みんなの生活の中にHIVを持ってる人だって、沢山いて当たり前の生活をしてて、医療だってなんだっていろいろ進歩して来てるのに、いまだに「自分とは関係ない」って思ってるのは、まあ、キツイ言い方をすれば教養がないって言ってしまってもいいんじゃないか。こないだも、橋口さんとおすぎさんとぼくと三人で番組やってたときに、ぼくはノンケなんですけど、ぼくがマイノリティになってる瞬間ってのがある訳じゃないですか。

だから、自分は普通、だなんて思わずに、生活の中でみんなが同じようなところで生きてるってことを感じるために、ちゃんと持たなければいけない知識だったり、ツナガリだったり、必要な環境だったりってことがあると思うんです。

人が人として冷たく見える瞬間って、「私には関係ない」って思ってる瞬間だと思うんですね。最近、アナウンサーの人とかAV女優の人とかが自殺するたびに俺がすごく憤るのが、たとえばこの間アナウンサーの人が自殺した時に事務所の人が「皆目見当が付きません」って言ってるコメントを新聞で読んだんです。でもね、一人で、孤独に死んでいった人に対して、そんなことしか言えないのになって、なんでもっと自分に来ることはなかったんだろうかくらいのことと言えないのか。自分を責めろとはいわないけれど、そんな風に死んでいった人がそこにいるのに自分の保身をするようなことしか言えないのになって怒りがわいて来て。

ああいう風景を見ると、それは病気にかかった人が相手でも自殺された人でもみんなそうですけど、ほんとに人が冷たく見えるっていうか、イヤな世の中だなんて思うんです。

ちゃんと人と人が繋がっていくしか人の未来や希望はないんだってことはホントにそうだと思う。今日だってこの会場にこれだけ人がいれば、ゲイの方もHIVキャリアの方もたくさんいらっしゃると思いますし、まあほとんどの女性の方はクラミジアかなんかを持ってると思いますけど(笑)、ここで今日集まってることが、袖触り合う縁って言うんですか?こういう機会に「あ、そうなんだ」って、すべてのことが自分と繋がる日常の中で起きてることなんだなってことを忘れないように生活したいなって思いますね。

つつじの花が...

—— (40代 会社員 ケイ HIV+)



丁度、つつじの花が街に溢れる季節。
彼と出逢って1年目を迎えていた。

メール送信⇒

くごめんね。今日検査の結果を聞きに行く日だったね。
本当ならメールじゃなく、
昨日までにちゃんと話をしなければいけなかった。
大丈夫だとは思うけど、
やっぱり感染させてたら・・・と思うと心配なんだ。>

出逢った時から、1年に1回は記念日に
HIV検査に行こうと話していた。
この1年間、HIVは薬でコントロールできていて、
ウイルス量も限界値以下ではあった。
セファーSEXにも心がけていたし、そんなはずはない、と
思っている、ただ実際はギリギリの接触もあった。
もし感染させてしまったら・・・どうしようと思っていた。
すると間髪入れずに・・・。

メール受信⇒

<はい、お疲れさま。これから行きまーす。大丈夫だよ。
もし感染したら、一緒に治していきましょ。>

こんな簡単で、優しい返信が・・・。
彼だって不安だろうし、
もっといろいろな思いを書いてくると思ってただけに、
かえってジーンときてしまい、
僕の目は涙でいっぱいになった。
車を止め、ただひたすら彼のマイナスの結果を祈る。
30分後再度メールが届く。

メール受信⇒

<マイナスでした。心配かけたね。ごめんね。>

夕飯をファミレスで一緒にすることにして、彼の目を見たら、
それだけでまた涙が溢れてきた。
メールのやり取りの中で感じたことを彼に伝えようと、
更に涙が止まらない。
そんな僕を見て、彼ももらい泣き。
その彼を見て、僕ももう一度もらい泣き。
そして2人で泣き笑い・・・。

AI



シンガーソングライター
<http://www.universal-music.co.jp/ai>

どうも、AIです。

今回手紙を読んで、本当に久々にバクバクしたんですけど、
いつもは笑ってばかりいるのに、
今日は息するのも忘れるぐらいかなり緊張……

この手紙の2人、ホントにうらやましい！
すごくシンプルな彼氏の言葉に優しさが溢れているし、
自分だったら同じことを言えるかってすごく考えた。
本当にいいオトコ！ 2人の幸せの秘訣を教えてください！

私もロサンゼルスにいた時に、ポジティブの友達がいる、
すごくいろいろなことを教えてもらったことを今でも覚えているし、
こういう手紙を通して本人が語る経験って、言葉にチカラがあるし、
説得力ある。

もうみんな一緒に生きてるのに、
時々そのことを忘れがちなってことを、改めて考えてみたり。

1人じゃね、やっぱりダメですよ、人は。

この手紙を読んで、私がみんなに一番わかってほしいな、と
思ったのは、自分を大事にしてほしいってこと。

自分勝手になるとか、
人を遠ざけて自分をプロテクトするとか、そうじゃなくて、
自分を大切にすることは、人にも思いやりを持って接するってこと。

それさえあれば、「あー！」みたいなことは起きないはず。

泣くより笑ってるのが多いほうがいいに決まってるから、
自分も周りも大事にして、
そのために自分ができることを周りにもたくさん話して、

一緒に楽しくやっていきましょー！

Living Together！

AIでした！



箭内 道彦

クリエイティブディレクター

今回の仕事を引き受けるまで、HIVのことが何もわからないままに過ごしていましたが、いろんな日常が描かれた“柔かい”手紙をたくさん読んで、ゲストの方の朗読を聴いて、やっとスタート地点にたてた気がします。赤が黄色になるみたいに、何かが劇的に変わったわけではないんだけど、ジワーっという変わり方でカラダが動き出したというか、初めて入ったスイッチがあって、これからも深くなったり浅くなったりしながら、ちよつとずつ考えていくんだろうなあ、と。きつと、聴いてる方の中にも、僕のような人多いと思いますが、HIVとの接し方って、何だか自分のココロのテクニクとか年輪からくる深みとかを要求されているようで、すごく難しいなあとはひるんでたんですけど、まずは知っていることだけでいいのかもしれないと思うようになって、すごく気が楽になりました。Living Together というと、病気の人を助けて、みたいな一方通行で考えてしまいがちですけど、病気の人に僕が助けられてもいいし、元気づけられてもいい。お互い様の構造がグルグル回り始めることが大事だと思うんですよ。経験してないから、近くにいらないから語れないわけではないし、遠慮しない感じでもっと双方向のコミュニケーションができるようになるっていい。

いい薬ができて医療がすすみ、HIVそのもののあり方が変わっているのに、いつまでも「コワイよ、危ないよ」と広告やメディアが煽った頃のイメージが消えていないですよ。漠然とコワイ、という気持ちを払拭して、特別になり過ぎたHIVを、沢山ある病気と並列なんだというところに戻してあげるために、朗読という表現はすごく強い力を持っていると思います。目で読む、耳で聴くだけではカラダに入ってこないものが、声に出してみると、すごく入ってくる。朗読って、誰にでもできる。開かれた表現だから、世の中でもっと流行っていいんじゃないかと思います。



延江 浩

TOKYO FM 編成局次長

HIVの問題を継続して乗っけて行こうって言うメディアがないと言われたのがすごく驚きます。エイズは、トレンドじゃないんだから、ちゃんと地道に、こういうことをやっておかないと。

ラジオって言うのはテレビとは違って、人と人をつなぐ「場所」なんです。ずっとラジオやってますけど、ラジオのDJってね、実は30すぎでから花開くんですよ。人と人をつなぐ時には、受け手も、それから送り手も引き出しっものが必要なのね。人生経験があったり、失敗した経験があったり。そういう人の方が伸びるんですよ。30すぎで家族の問題だとか恋人の問題だとかあと仕事の問題だとか病気の問題に関して一通り通過したDJっていうのは一様に長くもつんですよ。

でね、そういうスタンスから行くと、「エイズがトレンドだの、トレンドじゃなくなった」だのっていう価値観はないんです。

HIVを持ってるかもしれない、あるいはすでに持ってる人の言葉だとか気持ちに乗せていくためには、ラジオは使いやすいメディアかなって思うんです。ちゃんとふとところがあるからね。

HIVは心の問題とも繋がってるから、そういう意味でも、ラジオは適してるのかなって思っています。

そんなにえぐいメディアじゃないけれども、例えば何か、まだ真っ正面にぶつかったら言いにくいことをメディアとして使って頂けるならば、そしてそれによっていい作用が生まれるならばいいなと思っています。

次もやっていきましょうもうすでに営業の男の子たちは企画書あるいはこの前の特番の録音を持ち歩いて、いろんなところにセールスして歩いたりしてますよ。

ラジオ放送

「Entermax BIBLE」(2007年10月8・15・23日、11月29日、12月3～6日 O.A.)

MC: 坂上みき 柴田幸子 朗読: 中孝介 フローラン・ダバディ 大貫妙子 AI

「Diary BIBLE」(2008年5月26～29日、6月9日 O.A.)

MC: Chigusa 柴田幸子 朗読: 橋口亮輔 リリー・フランキー 中納良恵(EGO-WRAPPIN')

「BIBLE」(2008年12月1～4日、17・18日 O.A.)

MC: 箭内道彦 柴田幸子 朗読: 内田春菊 西原理恵子 曾我部恵一

公開収録イベント

「Tree of Love ポエトリー・リーディング Think About AIDS」(2007.12.14)

MC: 坂上みき 柴田幸子 朗読: 大貫妙子 中嶋朋子 坂上みき 小山ジャネット愛子 西任白鶴 堀内貴之

ライブ: 川村結花 熊本杏里 大樹

*2008年1月14日 Holiday Special(120min.)としてO.A.

「Living Together × TOKYO FM × ぐるりのこと。ポエトリー・リーディング Think About AIDS」(2008.06.06)

MC: Chigusa 柴田幸子 朗読: リリー・フランキー 橋口亮輔 佐藤江梨子 内田恭子 GAKU-MC やしろ教頭(School of Lock!) Chigusa

ライブ: 小原孝 Metis Akeboshi

*2008年7月4日 Sunday Special(55min.)としてO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS」(2008.12.16)

MC: 箭内道彦 柴田幸子 朗読: 内田春菊 品川祐 菊川怜 椿姫彩菜 箭内道彦

ライブ: 童子-T Saigenji 福原美穂

*2009年1月4日 Sunday Special(55min.)としてO.A. *2009年2月21日 Music Theater(55min.)として全国17局ネットO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS」(2009.6.13)

MC: 堀内貴之 柴田幸子 朗読: しりあがり寿 木山裕策 松本素生(GOING UNDER GROUND) 堀内貴之

ライブ: エリオット・ヤミン 松本素生(GOING UNDER GROUND)

*2009年6月25日 特番(55min.)としてO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS」(2009.12.18)

MC: 堀内貴之 柴田幸子 朗読: 茂木健一郎 高橋源一郎 松下由樹 河口恭吾 清水ミチコ

ライブ: 河口恭吾 清水ミチコ Fried Pride

*2009年12月29日 特番(55min.)としてO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS vol.6」(2010.6.4)

MC: 堀内貴之 柴田幸子 朗読: ビーター・バラカン 平野啓一郎 吉田秀彦

ライブ: coba 曾我部恵一 LOVE

*2010年6月28日 JFN系列38局ネット[扉=TO VILLA-]でO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS vol.7」(2010.11.8)

MC: 柴田幸子 朗読: ARATA 佐々木恭子 田中ロウマ 中村 中 あめぐみ

ライブ: 中村 中 マイア・バルー

*2010年11月19日 「トウキョウ カウンシル」(55min.)でO.A.

「Living Together × TOKYO FM ポエトリー・リーディング Think About AIDS Final!」(2010.12.17)

MC: 堀内貴之 柴田幸子 朗読: 太田光代 菊地成孔 鈴木おさむ 向井理 MEGUMI

ライブ: 安藤裕子 FUNKIST 星野源(SAKEROCK)

*2010年12月23日 特番(90min.)としてO.A.

Special thanks to...このプロジェクトを支えていただいた全ての出演者、スタッフ、そして関係者の皆様

www.thinkaboutaids.jp
コチラで過去の朗読を聞くことができます。

Think About AIDS Living Together × TOKYO FM

初版 第一刷 2009年

第二刷 2012年

発行: エイズ予防のための戦略研究・MSM首都圏グループ

協力: TOKYO FM

写真: Hiroyuki Takenouchi イラストレーション: くり助

デザイン: 水鳥デザイン株式会社

企画編集: 生島嗣、張由紀夫、東島由幸

お問い合わせ先: コミュニティセンターakta

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-15-13第2中江ビル301

TEL&FAX:03-3226-8998(担当:荒木、佐久間) Email:info@akta.jp

この冊子は、2011年度厚生労働省委託事業「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」で作成されました。

無断コピー・転載お断り

♥ TOKYO FM

LIVING♥
TOGETHER